東方【ＩＦ】の平和世界

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方【ＩＦ】の平和世界

【Ｎコード】
Ｎ０３２０ＢＡ

【作者名】
榊

【あらすじ】
狂王物語、悲劇と狂気、そして血に塗れた絵本は既に終わり、彼女達は世界の表から姿を消したのだった。そう、既に幕は閉じられ、狂気の絵本は終わったのだ。コレは【番外編】だ。せめてあの戦いの後、彼女達が平和でありますように。

プロローグ（前書き）

帰って来ました、プロローグと言う事で短めです。

プロローグ

今日も今日とてそこは平和だ。外の世界の様に文明が発達していないかもしれない。時間のゆっくり流れるその場所の名前は幻想卿。少し前に大きないざこざがあったが、今では平和な物だ。
今日も紅白の巫女がため息を吐く、こたつと言う外の世界から流れ着いた物に豆炭を少し足して弾幕で火を付ける。弾幕と言っても小さな火の玉的な物だ。

「よぅ！霊夢、今日も遊びに来たぜ！」

「魔理沙・・・この寒いのに何でそんなに元気なのよ」

「私にはミニ八卦炉があるからな、これに少し力を送っておけば発熱して暖かいのぜ」

「羨ましいわね、家にはこの炬燵位しかないから寒くてね」

「稗田の家に行けば暖かいんじゃないか？あそこにはもうアイツも帰って来てるんだろう？」

「あぁ、朝霧の事ね」

朝霧とは、この幻想卿が出来る以前から協力していた者の事だ。白銀の長すぎる髪に陰陽服、そして雪以上に白いかもしれない肌。無名の神、人間の賢者と呼ばれている。
そして、この世界線の稗田阿求は稗田阿礼以前の稗田、稗田阿明の頃にその朝霧と婚姻し、今、九代目で再開、稗田は不老不死の存在に成っている。周囲に降り積もる雪すら解かすバカップル、いや、

馬鹿夫婦だ。

「あの家に行くと阿求の視線が痛いのよ」

「あー・・・解るぜ。あの目は地霊殿に行く前に見た・・・あのパルスィ・・・だったか？同じ目だからな」

「うおー！霊夢！雪だ雪！」

「っさいわね萃香、鬼は良いかもしれないけれど私達は寒いの！障子を閉めてくれないかしら！」

外の世界では雪が降れば子供が喜ぶと言うが、本当であろうか。今一解らない。自分がこの神社を先代博麗から継いだ時から雪で遊ぶ事は全くしていなかった記憶がある。どちらかと言うと雪掻きが面倒だ。一度魔理沙にマスタースパークでお願いしたが、神社ごと綺麗に掃除されてはたまったモノではない。

「こう言う日には宴会に限るぜ！」

「馬鹿なのね、魔理沙って。どう考えてもこの寒いのに敷地内で酒を飲むって言うのも寒いでしょうに。ソレにこの時期紫は冬眠している筈よ」

「ソレは違うぞ霊夢」

瓢箪の中からわき出る無制限の酒を煽っていた萃香が瓢箪から口を放す。キュポッと音がした後に銀色の糸が瓢箪と彼女の口を繋ぐ。それを乱暴に拭いアルコールの入った瞳で霊夢を見た。

「今年は何を持ったか起きてるらしい、式から聞いた」

「式・・・？あぁ、あの狐ね」

「紫の保護者だぜ・・・あの狐」

八雲藍、彼女は苦労人とも言えるレベルだ。全員その光景が頭に浮かびうんうんと首を縦に振る。

「それにしても何の冗談かしら、あの妖怪が起きているなんて」

「何でも今年は初日の出を見るとか言ってたらしいよぉ」

そう言うと萃香は急に横に成り、そのまますぐに規則正しい寝息を立て始めた。おやすみ三秒とはまさにこの事であろうか。その内鼻提灯の出て来そうな彼女のとろける幸せそうな寝顔を見ると少し腹立たしくなって来る。

「にしても、この鬼は本当に最近よく寝てるよなぁ。山の神社にも出没して、鳥居の上で寝てたって聞いたぜ？」

「まぁ・・・萃香だから良いんじゃない？あの山の神社の神とは呑み友達とか言ってたし」

「うげ、神すらコイツの侵入を阻めないのかよ」

「粗ぶれば鬼、静まれば神と言うでしょうに」

そう言うと霊夢は彼女に薄い布団を掛ける。彼女の優しさであろう。博麗神社は、今日も平和で、それでも何か、物足りなさそうであっ

た。

プロローグ（後書き）

短い物しか描けませんが、これらかもよろしくお願いします。

薪はいらんかね？（前書き）

狂王物語、その中の人物数人が登場します。

薪はいらんかね？

息を吐くと白く曇り、空には蒼穹の空に白昼の月が浮かぶ。寒い季節だ、ソレも今日は異常に寒い。戸を開けてもそこにあるのは土色の地面だけで、遊ぶほどの雪はまだ積もっていない。子供なら心底心を躍らせる事だろう、しかし今の自分にとって雪はただの冷たい物であった。

歳はとりたくない物だと寺子屋の教師である慧音は腰を戸を全て開けた。家の中には優しい光りが入り込み眼を細める程に眩しい光りを手でさえぎる。

それと同時に、彼女は朝から大きな声を上げた。それもそうだろう。庭先に全身を甲冑で包んだ人物が立っていれば驚かない筈がない。しかもその手には鈍く光る剣を持っている。

「だっ誰だお前！？」

『声で判断しろ』

「朝霧か！？何でまたそんな恰好で！！」

朝霧八雲、人間の賢者は非常識とも言えるほどの恰好で登場した。

『五月蠅い、薪はまだ足りてるか？』

「ま、薪か？それならまだあるが・・・」

『そうか、では次に行く』

そう言ってガシャガシャと音を立てて出ていく朝霧に慧音は声を掛ける。とりあえずその鎧を脱げ！と。
そして、彼女達は今、炬燵に豆炭を入れてお茶を啜っていた。もちろん朝霧は鎧を脱いでいる。

「何で朝からあんな恰好していたんだ・・・」

『何故って、あの鎧は耐寒術式も兼ねている。驚きの温かさだ』

「他から見ると恐ろしく無気味なんだよ！！何で剣も持っていたんだ！！」

『薪を切って来てな、ソレに使っていた』

その言葉に慧音はガクッと項垂れる。何処まで世間体を気にしていないのか。これでも子供に好かれているのだから全く意味が解らない。そんな慧音の考えを無視するかのように朝霧は袖の中から毬を取り出し転がして遊んでいる。

「そんな名刀を使う事じゃないだろうが！」

『使わずに錆びさせるのも駄目だろう！？』

※刀などは使うと血糊などで錆びたりします。何もしなくても確かに酸素に触れて錆びますが。

「それでもあんな恰好してれば不審者として妖怪の賢者たちが大騒ぎするぞ！？」

ソレはそうだろう、彼女は生前、鬼武者として恐れられていた元人

間だ。そんな人物が刀を振り回しながら完全武装していれば誰もが警戒するだろう。

『あ、また降って来やがった・・・』

「ソレはしょうがないだろう・・・この寒さでこの季節だ」

『寒波まで幻想入りするもんかねぇ・・・』

「ソレは無いだろう、此処でコレだけ寒いんだ、天界なんて極寒だろうよ」

『地霊殿にでも行こうかなぁ。あそこなら温かいだろう、地熱で』

「温泉か、だがあそこは鬼にすぐ絡まれる」

地底は地上では危険な妖怪の集まりだがこの数百年の間で妙に丸くなった者が多い。今では観光に行く者も多く、地霊ではソレを迎え入れる宿まで建設された。
因みに、名物は古明地饅頭と地霊温泉卵。

『酒の飲みが多いのはしょうがないさ、皆暇なんだ』

「だが平和が一番だろうに」

『今度異変でも起こすかなぁ・・・』

「犯罪勧告は止めろ」

本当にやりかねないのだ。昔にも異変を起こそうとした事があった

し、実際に山の神社を壊滅一歩手前まで追い込んだ事がある。

『はぁ・・・あったまるなぁ、動きたくねぇ・・・』

「お前、いま威厳も何も無いぞ」

『良いんだよ、何時もピリピリしてると疲れるだろう』

山の神しかり、新しく異変を起こした連中同じく、だ。最近あのキョンシーと妙に仲良くなってしまったと思う朝霧。まあお互い既にアンデッドなので通じる物があるのだろう。その他にも布都とか言う人間？ともよく話をしている。まあ、どちらかと言うと孫の感覚に近いが。

「それにしても、昔は戦闘狂だったお前は良く落ち着いたなぁ」

『五月蠅いよ小娘、私から見ればお前もまだ私の半分も生きていないんだぞ？』

「この時間の停止した幻想卿でその言葉が意味を持つとも思えないけど？」

『はは、確かにのぉ』

そう言うと彼女は遊んでいた毬を袖の中にしまった。しまったかと思うと次は普通に立ち上がり鎧を装着した。剣は腰の鞘に収まっている。

『私はそろそろ行くよ、美味いお茶をありがとうな』

「何だ、やっぱりその恰好で回るのか、変人扱いされるぞ？」

『男から女神に成った時点で私は変人かと思うがね？』

「・・・（汗」

豪快に笑うと彼女は赤黒いマントを靡かせながら白い雪が降る中へと進んで行った。次は誰の家に行くのであろうか、不安しかない。それより、誰の家に行くと言うより次は誰が犠牲者かと聞いた方が良いのかもしれない。

「あや？こんな朝早くからどうしたのですか慧音さん」

「文か・・・いや、お前に教えるとろくでも無い事になりそうだな」

「大丈夫ですよぉ、清く正しく、射命丸ですよ？」

「お前そう言いながら前、紅魔館の吸血鬼の母を怒らせてただろう？」

紅魔館に住む吸血鬼姉妹の母、本名は既になく、宝石の翼と蝙蝠の翼を持つ髪の長い吸血鬼でシングルマザーである。男性を必要としない出産方法を試した結果、シングルマザーに成ったのだ。そして不思議な髪色をしている。金髪と青髪が混じった様な色の髪の持ち主である。

「ですが、今からでも遅くはありません、幻想卿最速は伊達じゃない！と言う事で追いかけますねぇ！！」

「あ、おい！！・・・はぁ・・・何も起きなければ良いが・・・」

慧音は自分の予想が的中しない事を祈るだけであった。

薪はいらんかね？（後書き）

シリアス？今回は関係ない・・・筈

薪売り最後の一軒（前書き）

ほのぼの

薪売り最後の一軒

魔法の森を疾走する2つの影、片方は重そうな鎧を身に付けながらも木の上、つまり枝を足場に恐ろしいスピードで走っており、片方は黒い羽根で彼女の後を追っていた。
それにしても恐ろしい速さだ、ぶつかれば大けが、またはそれ以上かもしれない。

「えぇい！ピントが合いませんね！！」

『ふはは、烏天狗如きが私を捕えられるか！』

風神少女と無名の神の追いかけっこ。人間の眼でギリギリ捕えられるかどうかのスピードで疾走する彼女達。お互いにその手にはスペルカードを握っていた。お互いの進路を妨害する為である。

「ッ流石天魔様のご友人、ですが私も幻想卿最速を自負する身、そう簡単には取材をやめませんよぉ！！」

『あのロリ娘と私を比べるか？天魔など私の足元にも及ばぬわぁ！！』

天魔、天狗の長だがその容姿が完全に幼女なのであまり表に出て来ない引き籠り、朝霧とは生前からの付き合いで葬式にも招かれた。大きな黒い翼を持ち、天狗の大扇と言うモノを持っている。長い黒髪で大天狗達も絶対に逆らえないほどの力を持つが、河童の科学、ステルス迷彩を手に入れてからは良く抜け出す。

『お遊びはこれまでだ、私は薪を売っているのでね、さらば』

その言葉と同時に彼女は霧霞のように消えて行ってしまった。まるで先ほどまで此処に居た彼女は幻のように。

「あ、あやや・・・吸血鬼の持つ霧散と同じ技ですか・・・コレは気配でも気が読めませんし・・・椛にでも頼みましょうかね・・・」

流石のパパラッチもコレは諦めたようだ。

―――――――――――――――――――――――――――――

人形使い、アリスの家。今日も彼女は自身が魔界から持って来た魔導書を呼んでいた。流石魔界の魔導書と言うべきか内容が変化し、別の記述についても調べる事が出来る。

興味深い記述を見つけてはソレを溜めして見る。以前作った実験中【ゴリアテ人形】も完全に自立は出来なかった。今ではあまりの大きさに家の地下で保管している。地下の広さは得意の魔法で何とかした。

そんな彼女は片手に持っていた紅茶をいっぱい呑み、もう一度グリモワールに目を落とそうとする。その時、玄関を叩く音が聞こえた。

「（こんな時間に珍しい、一体誰かしら・・・？）」

膝掛けを椅子にかけて玄関に向かう、廊下はやはりと言うべきか冷たかった。冷え切った空気が身を切る。

「誰かしら？」

『私だ』

「朝霧？名をいいなさ・・い・・よ・・・？」

ドアを開けるとそこには完全武装の鎧が立っている。その光景にアリスは眼を白黒させた。

『やっぱり脱いだ方が？』

「当たり前でしょう！？怖いからその恰好でウロウロしないで！！」

『・・・わかった』

若干落ち込み気味の朝霧は鎧を解除して普通の着物に姿を変える。白銀の髪が降る雪と合わさり綺麗に輝いた。

「で、どうしたのよ？」

『薪は足りているか？』

「薪？・・・どうだったかしら、最近確認もせずに使っていたから・・・」

やはり、寒いらしい。それほどまでに無意識に使っているのであろう。こいしは関係ないとして。

『薪を売っているんだ、1本5円程度でな』

「外の通貨なのね」

『どちらでも良いのだが、今の幻想卿では円の方が使われているだろう？』

以前、紫が思い付きで急に通貨の単位を円にしたのだ。境界が弄られた事によってどちらでも買い物が可能だ。

「へぇ・・・そうね、数本買っておこうかしら」

『おう、買っとけ』

「でも、何故貴女が売っているのよ？」

『知り合いの娘さんに頼まれてね』

相も変わらず、不明な人脈関係だ。まあ、里の人間の相談役もやっているので当たり前かもしれないが。

『丁度此処でリストに乗っているのは最後でな。それなりに売れた』

「全く、その恰好で回っていたの？」

『幻想卿では常識など紙きれ同然だろう』

「それ、多分貴女と山の巫女位だと思うわ」

朝霧は何処に持っていたのか薪置き場に薪を積み上げると、料金を受け取ってアリスと少々の雑談をし、そのまま帰って行った。帰りに永遠亭によって薬を買い、娘さんの所へ戻った様であった。
ただし、次の日の新聞には鬼武者復活か、と言う文の記事が大騒ぎを起こした事は言うまでも無い。

薪売り最後の一軒（後書き）

どうしようか、後書きにも前書きにも書く事がない・・・。

母さん【が】迷子です（前書き）

２０１２年年末に人類が滅亡云々かんぬん

母さん【が】迷子です

崩れ落ちた廃墟に、一人の若者が眠っている。その若者の手足には酷い傷があった。一体誰がこんな事をしたのか、考えても答えを知る者はいない。若者の首には銀のネックレスが垂れていた。恐らく彼の名前を刻んだ物であろう。可哀そうに彼にも家族がいただろうに、彼の眼の前には現れたのは一人の吸血鬼、不思議な髪色をした彼女はニヤリと口角を上げて、彼にこう言葉を掛ける。

「此処はどこ？」

「え？」

「え？」

不思議な髪色を持つ彼女は、現在迷子だ。宝石の様な羽と、蝙蝠の羽を広げて銃弾飛び交う世界を彼女は右往左往としている。たまに銃弾が当たるとそちらの方向に弾幕を飛ばし、鉄の塊などを破壊する。

「（此処は何処なのよ・・・助けて朝霧！紫でも良いわ！！）」

普段屋敷に引き籠っている彼女の名は紅い月、レミリア、フランの母である。

「あや？アレは・・・まさかどちらかの軍の兵器ですかね？コレはスクープかもしれません！！」

「あら？貴方は」

「ひっは、早いですねぇ」

紅い月の眼の前に居る少女は黒い髪にアナログのカメラを構えていた。その容姿はどう見ても幻想卿のブン屋事射命丸である。紅い月は彼女の存在を確かめると、ほっと一息吐いた。

しかし、慣れた幻想卿の匂いがしない。幻想卿住民ならすぐに解る筈だが・・・。

「貴女、名前は何と言うのかしら？」

「わ、私は射命丸綾々と言います・・・は！これはもしや尋問ですか！？」

「何処にわざわざ日本語で尋問する兵体が居るの・・・」

「そう言えば日本語！ソレにその恰好！貴女、もしかしたら朝霧さんを知っています？」

「朝霧を知っているの！？」

以外過ぎる所から助け船は出航する。その通りであった。

――所変わって奮戦地帯から２００キロは離れた場所、此処まで来るのには簡単だった。何せ紅い月が彼女を抱きしめて跳んだのだ。紅い月は若干の疲労を見せるが、一方で綾は楽しそうである。

「あやや、どうもすみません。私あそこに行くまでに徒歩でして、学生ですし免許は一応あるんですがね？」

「そ、そんな事はどうでも良いのよ、貴女、朝霧を知っていると言

う事は知り合いか何かなのよね？」

「？えぇ、一応以前取材させていただいた程度ですが」

「その朝霧はその後どうやってこちらの世界から帰って行ったの！？」

そう、知りたいのは其処だ。どうやって彼女は幻想の都に帰ったのか。自分も同じように帰れるかもしれない。

「あや、それでしたら日本まで行かなければですねぇ・・・明日なら私も丁度帰国しますし、今日はそこら辺の安宿にでも止まって明日出発しましょうか！」

「え・・・、でも、貴女大丈夫なの？お金もかかるのでしょう？私飛べるわよ？」

「何を言うのですか。これでも私の家はお金を持っている方ですし、私もお小遣いをかなり溜めています。ソレに、命の恩人の知り合いさんを見殺しには出来ませんしね」

「そ、そう？貴女が良いのなら私もそれで良いのだけれど・・・」

「そうと決まれば早速宿を決めましょう！！」

彼女はそう言うと持っていた地図を広げ、最も安全そうな宿を探し始めた。その速度は異常と言えるかもしれない。パパラッチをやっているとそう言うスキルが成長するのであろうか。

紅魔館の事は・・・心配いらないだろう。パチェも居るし美鈴も居る。まあ、咲夜がいれば間違えは無いと思うが・・・。

――安宿――

「中々な所ですね、惜しいのはベッドが固いと言う事ですか」

「ここら辺は戦時中何でしょう？それでここまで整っていれば大したものじゃない。水も出るし」

「・・・今の宿は大体こう言った場所が多いですよ？」

「あら？でも護身用の槍とかがないわねぇ」

「ソレは・・・何時の時代の宿です？」

綾はそう言うと宿の中を写真に収めた。一応、こう言った場所に泊まったと言う事を記録する為なのであろう。

簡単な食事とシャワーを済ませて、彼女達は固いベッドに横に成った、若干のスキマ風が寒いが、ソレはぜいたくは言えないと言うモノだ。しかし外の世界にもまだこれ程に優しい感情を持った少女が居るのかと思う。

翌日、眼を覚ましてそうそう、簡単な支度だけで宿を出た。何でも飛行機とやらに間に合わなくなるとか。飛行機と言う物は何なのか、と聞こうとも思ったが、焦っていたようなので聞かない事にしよう。

「人が、いっぱいだな」

「あやぁ・・・物凄い視線を集めていますねぇ・・・（紅い月さんは美人ですし・・・服装も独特ですから・・・）」

「？どうたの、急ぐんでしょう」

「あや！こっちですよ！！」

放っておくと彼女は恐らく写真撮影の的にされそうなので急がせる。飛行機のチケットを２人買い、旅客機の中に乗り込む。丁度隣の席が開いていたので良かったとため息を吐いた。

「ね、ねぇ綾。もしかしてこの鉄の塊は海の上を飛ぶのしかしら？」

「そうですよ？日本は此処から遠いですから」

「ソレは・・・不味いわ・・・」

「どうしたのですか？」

汗を流しながらそれはまずい、まずいと繰り返す紅い月。

「どうしたのですか、本当に（汗」

「私はね・・・吸血鬼なのよ？」

「・・・え？」

母さん【が】迷子です（後書き）

滅亡したら、次の知的生命体は何でしょうね（笑）

母さんはやっと帰れます（前書き）

きゅっぷい☆

母さんはやっと帰れます

日本は雷雨であった。吸血鬼は元々流水等を嫌い、太陽に背を向けた種族故に日を嫌う。しかし、雨が降っていても駄目とは流石に弱点が多いのではないだろうか。

「待っていたぞ、紅い月」

「あや？誰ですあの方は」

「・・・？私も記憶にないな」

そこに立っていたのは長い金髪の女性であった。妖艶とも言える雰囲気を醸し出す女性は黒を基調とするドレスのような服を身に纏っている。

「全く、お母様から言われなければ迎えになど来なかった物を」

「・・・！もしかして、朝霧が話していたエヴァンジェリンか！」

「・・・往来で人の名前を大声で叫ぶ奴がいるか！！」

「な、なにをぉ！」

「あ、あはは。お迎えがいらしていて良かったですね？」

綾はそう言うと荷物を持つ。

「あ、ありがとうね。後日位に朝霧を通してお礼をするわ」

「い、いいんですよ。私も彼女には恩がありましたしね！（ソレに、空中写真は高く売れそうですし）」

「そ、そう？善人というのはこの世界にもまだ居たのね」

「（うっ・・・心が痛みます）」

「おい、紅い月、さっさと来い。従者を待たせているんだ」

「解ったわ、じゃあね綾、また機会があったら会いましょう」

そう言うと彼女達は解れ、エヴァンジェリンが待たせていた車に乗り込んだ。

車の中に乗っているのは緑の髪をした何処か機械じみた女性と長いボサボサの髪を持つ少女だった。

「やぁ、会うのは二度目だね」

「牡丹・・・貴女何故こちらの世界に？」

「いやぁ、僕もビックリしたよ。何せ別世界のキティが来て僕をこの世界に連れて来たんだから」

「同じ吸血鬼には耐性が無くてね、お母様の娘を連れて来ておけば無問題だと思ったんだ」

牡丹は紅い月の隣に座っている。その目は珍しく開かれ、紅い瞳がしっかりと紅い月を捕えていた。

「さて、どうやって君を元の幻想卿に戻そうかね」

「何も考えてなかったの！？」

「いや、そうでもない。樹海にある転送装置を使えばだな・・・」

「あぁ・・・御免こっちの世界のエヴァ、それ前の戦いでもう使えなくなった」

「・・・え？」

「完全に詰んでますね、マスター」

「うううっうるさい！！何か手がある筈だ！！そもそもお母様は！？」

「父さんだったら今日は来れないよ。何でも不死の方と会う約束が有るんだって」

ソレも千年も前の約束でね、と続ける牡丹はその手に持った本に目を落とした。紅い表紙の絵本の様な本だ。以前朝霧が持っていたモノだが今では彼女に渡っている。

「そもそも誰と会う約束してたのよ、普通の人間ならもうずっと昔に・・・」

「八尾比丘尼様だよ、何でも昔言い寄って来る貴族からかくまってた事があったらしくてね。今じゃ人知れぬ孤島の山奥の神社に暮らしてるらしいとは言っていたけど・・・」

「・・・本当、朝霧の交友関係って何なのよ・・・」

日本だけではなく、西洋からアジアまで、彼女は生きている時に何処まで旅をしていたのであろうか。まあ、昔は血の気の多い人だったらしく、大軍を一人で蹴散らし、血濡れた姿で立つことから鬼武者と畏怖されていた訳だが。

「帰る手なら、有るじゃないか」

「知っているのか牡丹」

「その知っているのかライデン的な言い方は止めてくれないかな」

この世界で人間に紛れて生活しているガイノイド、彼女なら解るのではないだろうか。

「オモイカネ、彼女を忘れて貰っては困るよ」

オモイカネ、彼女は最後の戦いの後に人間に紛れて生活している。魔都オスティアの技術者の技術の結晶であり人間に酷似している彼女だから出来る事かもしれない。胃と酷似した機関で消化し、その消化活動で産まれたエネルギーを自己の力に変換できると、本当に人間と変わりない固体なのだ。

その名前も、日本の知識の神から由来しており、恐らくはであるが何とか出来るであろう。

――――――――――――

「と、言う訳ですか」

「何とかならないかい？オモイカネ」

「はい、可能と言えば可能です。が、少々準備があるのでお待ちを」

マンションの一室を借りて生活していたオモイカネ、部屋の中には動物系の子モノが多い気がする。中には白い猫や黒い猫の置物や、何を思って買ったのか招き猫まで置かれていた。

「お風呂場に結界を結び、その中を通って結界の中へとお導きします。丁度午後3時くらいには結界が緩む場所と、私の作った道が繋がる筈ですから」

「色々と悪かったわね」

「ふん、別に良い。同じ吸血鬼だしな」

「ツンデレマスター」

「張り倒されたいのか・・・ボケロボ・・・」

「僕も気にしていないさ。何せ僕も暇を持て余しているからね」

「御気を付けてお帰り下さい。紅い月様」

「えぇ・・・お礼は後日、美鈴にでも届けさせるわ」

ようやく、彼女も幻想卿に帰還できたようです。

母さんはやっと帰れます（後書き）

ボウと契約し（ｒｙ

ちょっとしたお話・前（前書き）

書く事を

ちょっとしたお話・前

人の子よ、無駄な殺生は好かぬ、願いを申せ。
社の中から美しくも威厳漂う言葉が聞こえてくる。その社は絹の様な物が垂らされており、中の様子がうかがえない物と成っていた。その社の前に膝をつき、少しばかり身体を振るわせる少女は白い着物を着て、顔には眼と描かれた紙を張っていた。神を穢さず、神に穢されず。決してお互いの姿を肉眼で直視してはならないのだ。

「さ、最近、人里の実りが少なくなってきています。何とか・・・」

『ふむ・・・実り、であるか』

神状態の朝霧は、人里の人間と力を解放した状態（三重の光輪が出現している状態）で会う場合、このようにして精神への負担を和らげている。何故解放しているかと言うと、人里のこの娘が、神としての朝霧八雲を頼って来たからだ。

『成程、解ったぞ。最近土地が荒れて来ている。ソレは大地への信仰が足りぬからだ』

「信仰・・・ですか？」

『世界の全てには神が宿る、故に八百万。雨を司る神も居れば戦を司る者、呪詛を司る者と様々だ。その中でも大地の神への信仰が足りぬと見える。これはどう言う事か』

「それは・・・」

『最近、廃止された行いは無いか。昔から有ったモノでだ』

「そ、そう言えばあります。博麗神社近くの小さな社に年に一度供える物を供えていません」

『私はソレが原因だと考える。他にはないか』

「あ、ありません。ありがとうございます」

その言葉を合図に社の周囲に灯っていた火が全て消え失せる、社の中の日も消え、絹の幕があげられる。そこから顔を出したのは疲れた顔の朝霧であった。既に光輪はしまわれ、人里の賢者としての顔に成っている。

「お疲れさまでした、朝霧様」

『阿求ー疲れた―』

娘を見送った後にすぐ、彼女はコロンと横に成った。何せ神の力はそう簡単に使うモノではない。使う時があるとするのなら、それはもう少し大きな事に使う事が普通だ。信仰などそう簡単に集められるモノではない。

何せ異変が起きてもスペルカードと言う平和的解決手段がある今、本当に神の役目など人間の相談役か、大地等の浄化程度である。それを寂しく思うかどうかは、解らないが、それでも神の出番は完全に減っているだろう。（中には最近人気に成っている神も例外で存在するが）

『あー、まだ山の神社に用事があったんだ・・・』

「お山のですか？」

『神2人に呼ばれてるんだよ・・・私を酷使しないでください。まだ病み上がりです』

「お弁当は必要ですか？」

『いや、大丈夫。そんなに遅くならないで帰って来るよ』

「まだ外は寒いです。コレを首へ掛けて行って下さい」

そう言うと阿求は黒色のマフラーを朝霧に渡す。どうやら手作りのようだ。これに喜ばない夫はいないだろう。まるで某動物好きの人のように阿求の頭を撫でる。彼女の顔は真っ赤に成程照れていた。

『じゃぁ、行って来ます』

「はい、御気を付けて」

外はまだ、雪が残っている。と、言うよりもまだ降っていた。何と言う長い間降っているのだろう。流石に雪見酒も飽きたし、妻と共に雪見と言うのも妻の体には辛いモノがある。（不老不死に成っていると言えど、夫として妻の事は考えている）

「およ？盟友じゃないか。どうしたんだいこんな雪降る昼近くに」

『にとりこそ、こんな山の手前まで出て来てどうした』

「私はアレだよ、冬だろう？」

『？』

「夏に備えて冷気の研究をね、また夏は暑い筈だから」

コツコツとした研究、頭が下がる。

『でも、この気温じゃ寒くない？』

「夏だと、これ位が良いんじゃないかな？気持ち良く感じると思うよ、夏場だとね。まぁ・・・冬場だと寒いと感じてしまうけれどね」

『人体の神秘って言う奴か？・・・でも寒いだろう、この気温じゃ夏風邪だぞ？』

「そうだね・・・そこは何とか調整するよ」

『風邪をひかない程度にな』

「盟友もね、あ、ソレとまた天魔様が逃げたらしいから見つけたら天狗の里に連行してあげて、椛が探してたよ」

『またあいつは・・・』

そう言うと神力で空を飛ぶ、巫女がやっているのと同じ原理でだが、これでも意外と早い。まあ確かに羽を出した時と比べると頭を捻ってしまうが、それでもこちらの方が消費が少なく良い調子だ。

飛行中、下を見てみると白狼天狗や大天狗、ソレに烏天狗と総動員して探していた。流石河童印の光学迷彩を持っているだけはあるだろう。天狗の中には普段引きこもりのはたてから何時も忙しそうに

飛び回っている文、そして千里眼持ちである筈の椛も居た。

――山の神社――

「何奴！」

『・・・早苗、お前』

「・・・そんな顔しないでくださいよ、最近襲撃が多いので」

『襲撃？誰の』

「辻斬りさんの」

『みょーん・・・』

どうせアレだろう、彼女の事だ、神を切る事が出来たら自分はまた一歩師匠に近づける理論だろう。実際妖忌は確かに強いがそれほどまでではなかった。生前刃を交えた事はあるが、アレでは普通の剣豪レベル、普通の妖怪には苦戦しないが、名のある妖怪、それ以上には苦戦するレベルだったと思う。まあ、孫である妖夢は真面目な子だ、幽々子の言葉をそのまま信じてしまったのかもしれない。

『奥に通して貰うよ、何か話しがあるようだしね』

「あ、はい。どうぞ」

妖夢関係だろうか、それなら冥界に直接言えば良いモノを、そう考えながら奥の部屋へと足を進める朝霧であった。

ちょっとしたお話・前（後書き）

強いられているんだ！（誰に・・・？）

ちょっとしたお話・中（前書き）

お絵かきの息抜きに・・・

ちょっとしたお話・中

異変、山の神社に呼ばれた理由だ。確かにそう言われればこの雪も長い。少し前に降って来たかと思えば休むことなく降り続けている。山の神社でもその異変に気が付いたらしい。
井戸も凍り、断水の為に河童の科学で解消した物の、流石にそろそろ幻想卿でも雪崩などが危険視されて来る。今年は紫も起きている筈なので天候の境界も操作される筈であろうが、一向に操作されず、降り積もる一方。

『で、私と早苗で見てこいと？』

「いや、もう一つ問題があるんだ」

「・・・アンタは、人里で最近起きた事件を知っているかい？」

『？あぁ、前に慧音が教えてくれた、何でも数人の男が結託して数人の少女を切り付けたって言う事件だろう？重症人は3人、その場に居た薬剤師の弟子である優曇華院の応急処置により命を繋いだって言う』

「その中の、重傷者の中に実はね、早苗が居たのさ」

『・・・なに？』

ソレは初耳だ、朝霧的にはこういう事件があったよ位な認識であった（既に四季映姫が男性に裁いた為）が、その情報は回って来ていなかった。

「その事に諏訪子がキレちまってね、諏訪大戦の恰好で何処かに姿を消しちまったのさ・・・」

『諏訪子は、祟り神だな？』

ソレはまずい、確かに昔、自分が生きていた時代に諏訪子には有った事があるが、昔の彼女は髪も長く身長なども信仰のおかげだろうか、それなりにあった。と、言っても神奈子以下だったが。

『この雪の原因の一人と化してる可能性があるな。しかもこの大雪、そろそろ紅魔のメイドや魔法使い、巫女も動くレベル』

「そうなんだよ、でも」

『そうだな、全力に近い状態の諏訪子に勝てる筈がない。彼女達がどれ程強くても、彼女は土地神の頂点と呼ばれていたのだからね』

ソレに、戦前の彼女は生贄等の儀式も用いていたと聞く、病から毒、全ての呪いを使い、戦輪（チャクラム）を使い敵武将の首を切り落としては紅い舌を出し血を啜る。畏怖され、恐れられ、祀られた神だ。戦前の、つまり信仰を熱く受け持っていた神奈子でも危ない程に追い詰められて、ようやく勝てた様な相手である。

『厄介だな、私でも神化しなければキツイかもしれんし、下手をすれば・・・』

「止めとくれよ、アンタに任せると生きて帰してくれる気がしない」

『さて・・・誰に、丁度良い者はいないか・・・』

朝霧は動けないと考えて、他に諏訪子と戦えそうな者を考える。誰が居る、一体誰が。頭をひねれば捻るほど、知識が湧いてこない。出て来るのは誰も彼も幻想卿には居ないモノばかり。

『諏訪子と張りあえる神だろう？スサノオ辺りか？』

「奴は駄目だ！叢雲之を使って来そうだし」

『三貴神』

「来てくれる筈がないだろう！！」

『アマテラス』

「太陽とか落とさないよな・・・？」

めぼしく、止められる神が居ない・・・。今に成って自分の交友関係はぶっ飛んでいるなぁと実感する。いや、待て、居るじゃないか丁度良いのが。

『そこに居るんだろう？天魔』

「・・・え？」

「む、何故ばれたのじゃ？」

『完全に妖気を立っていないからな。集中すればすぐだ』

天魔と呼ばれた者は見に纏っていた羽織を脱ぐと透明だった姿が解除された。どうやらアレが光学迷彩らしい。どこぞの伝説の戦士の

蛇も使っていた気がするが、動力は本当に電気なのであろうか。

「妾一人にあの土地神を止めろと？無茶を言うでないぞ？？」

『天狗の大扇があれば負けはしないだろうが』

「馬鹿もの、既に一度奴の眼の前で使っておる、既にパターンは読まれとるよ」

使えない天狗の長だ。確かにコイツは元々所持スペルが少ないとは知っていたが、まさかここに来てまでスペル1枚を通して来るとは思わなかった。

『しょうがない、奴に連絡を入れるか？』

「奴？」

朝霧はそう言うと袖の中から札の様な物を取り出しおでこに当てた。まるで念話をするかの様に。

「奴と言うのは誰じゃ？」

『飛騨の大鬼神』

「両面宿薙（リョウメンスクナ）！？」

昔は荒れていたが、今では地獄で獄卒として働いている。幼女2号だ。紅い着物に長い黒髪、額には大閻魔に取り上げられた角が再生して来ており、小さな角がある。長い黒髪は後ろで永琳のように結んでいた。

「余に何用じゃ？」

『お前に土地神の頂点と呼ばれていた神を生け捕りにして貰いたい』

「・・・ほぅ」

ギギギッと空気が引き締まった。どうやら引き受けてくれるようだ。

「久々の現世じゃ、終わったら共に酒を飲んでくれるな？」

『ソレが報酬で良いのか？』

「何、地獄では酒も満足に呑めんでな」

ソレに、お前の言うとこには逆らえぬじゃろうしな。と彼女はカラカラ笑った。これが大鬼神と呼ばれた者の器の大きさだ。

『見習え、天魔』

「わっ妾じゃってやる時はやるわい！！」

「ほほぉう、ソレは良い事を聞きましたよ天魔様」

「ひっ！？文に椛！！？」

何時の間にはそこには二人の天狗が立っていた。恐らく椛の千里眼であろう。

「さぁ！お仕事に戻っていただきます！！こうしている間にも書類

は溜まっているのですから！！」

「むぅううう！！」

天狗は今日も忙しそうだ。本来の天狗の役目は人間などの善行や悪行を纏め、ソレを報告書にまとめて地獄に回す事でもある。その仕事の他にも天魔には里の最近の情勢や民（天狗達）の声や要望を聞かねばならない。以外と忙しいのである。

『じゃあ、頼んだぞ、スクナ』

「任せよ、余は鬼じゃ。結んだ約束は果たす。鬼は嘘が嫌いじゃからの」

カラカラ笑う彼女は、その手に棍棒を軽く持って諏訪子を探し始める為に外へ出たのであった。

ちょっとしたお話・中（後書き）

お絵かきも楽しいけれど、こっちも楽しい！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0320ba/

東方【ＩＦ】の平和世界

2012年1月14日23時50分発行